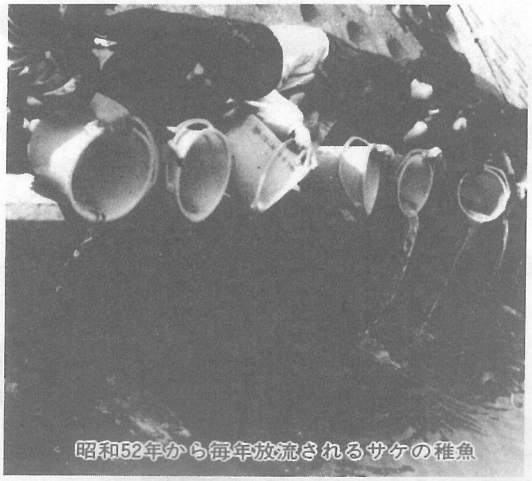
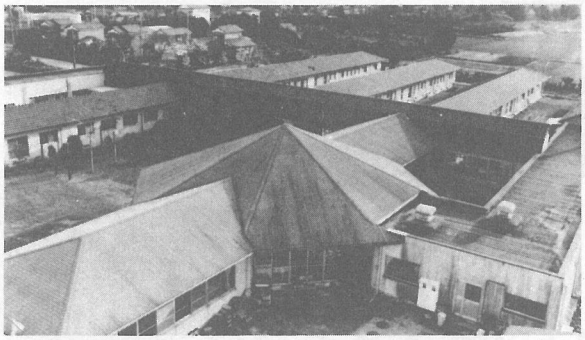
町の名広めた鮭溯上


昭和52年から毎年放流されるサケの稚魚

坂田池畔に老人ホーム


お年寄りの心を生かした設計の養護老人ホーム

合併30年

よもやま話

最終回

小沢春光（栗山）

苦心のアイディア設計

昭和47年、常陸宮・同妃両殿下をお迎えして〝海の子供の国〟がオープンし、次代を担う子供たちへの、こよなき贈り物としての喜びにあふれている時、坂田池畔では老人ホームの新築が始まっていました。

昭和32年に横芝町立として建設した老人ホームが、その後転入してくる老人の方々の前住地が次第に広範囲になって、入所希望者が増加してきたことや、それまでの建物が老朽化したことなどから、横芝町で求めた風光明媚（びび）の敷地を無償で貸与することを条件として、山武郡市広域行政組合に管理運営が移され、1,000名の老人が余生を送るのにふさわしい建物を造ることになったのです。

完成は昭和48年でしたが、その時院長であった本間重寿さんは、この廊下や居室を、○丁目○番地、また夫婦の居室の廊下を寿（ことぶき）町と呼ぶなど、在院老人の方々が「なるべく自分の家にいる気持ちに」との配慮をされたということです。

この呼び名は、もちろんホームの中だけのものだったのですが、老人の方々には好んで使われました。中にはその名称で老人の方に返事が来たため、郵便局から「必ず〝坂田池〟の地名を入れるように」と注意をされる場面もあったということですが、それは一つのハプニングとして、今でもその呼び名は使われているという話です。

20周年には町史刊行

◆史談会の活躍目立つ

合併20周年を迎えた昭和50年には、後世への文化的遺産とも言える〝横芝町史〟が刊行されました。

横芝町出身である県の歴史研究家、海保四郎先生に編さん委員長になっていただいて、昭和45年に手をつけ始めた町史編さんは、その資料の収集も大変だったでしょうが、更にこれを整理区分して1冊の本にまとめる作業を果たされた事務局員（ほとんどが企画課職員の兼務）の辛苦は大変だったと思います。

昭和50年、その努力は実り、どの町村史にも劣らない町史が刊行されたのですが、本当に心から「ご苦労さま」と申し上げたいと思います。

そして、この陰には顧問の先

あしあと

52年

5 町婦人会結成30周年式典
7 上水道給水開始
8 航空機騒音テスト飛行
冊 円高不況で就職難、王本塁打の世界記録樹立

53年

5 新東京国際空港開港
9 全室防音工事始まる
11 第1回町内一日清掃
冊 新空港の騒音問題が話題を独占、サラ金が社会問題化

54年

5 NHKのど自慢放映
5 遠山へ初の共同利用施設
7 騒音区域見直しで新たに遠山・姥山など対象に
10 大型台風20号で被害甚大
冊 第2次石油危機で省エネルギーの気運高まる、鹿野山でトラ脱走騒動

55年

6 中台へ航空機からの落下物第1号
8 冷夏のため農作物や海岸観光業者被害